教員養成における海外留学の役割
－武庫川女子大学文学部教育学科 MFWI プログラムの成果と展望－

Role of studying abroad for teacher training
-Effects of MFWI program at Mukogawa Women's University and its future-

北口勝也*
KITAGUCHI Katsuya*

論文要旨

2002 年に開始され，これまでに 7 回おこなわれた武庫川女子大学文学部教育学科の海外留学プログラム（MFWI プログラム）の内容を概観し，その効果と将来像を論じる。MFWI プログラムは，米国ワシントン州にある分校で，2 年次後期に約 3 カ月半にわたって英語および教育に関する科目を学ぶ，全国に例のないユニークなプログラムである。英語力は TOEIC スコアで平均約 140 点の増加を見るほど向上し，日米の教育を比較しながら学ぶことで，教職専門科目に関する理解にも大幅な向上が見られる。また日米で姉妹校関係を結んでいる小学校を訪問し，その交流を支援する活動をすることによって，国際理解教育の実践法を学び，地域への貢献も果たしている。

１．はじめに

2008 年 8 月，文部科学省から発表されたあるニュースが，新聞やテレビなどで大きく取り上げられた。そのニュースは新しい小学校学習指導要領に，いわゆる「英語必修化」が盛り込まれるというものであり，2011 年度より，小学校 5・6 年生に，年間 35 時間の「外国語活動」が導入される。その授業の主な担い手は学級担任である，との内容であった。そこから遡ること 6 年，2002 年 9 月に武庫川女子大学文学部教育学科に画期的な海外留学プログラムが設けられた。教育学科において小学校教諭・幼稚園教諭・保育士などの免許・資格取得を目指している学生たちが，アメリカにわたり，約 4 か月にわたって英語と教育を学ぶ。その学びの場である Mukogawa Fort Wright Institute の名を冠して MFWI プログラムと呼ばれている，このようなプログラムは日本では他に例がなく，まさに日本唯一といってよいユニークなプログラムである。現在までにすでに 7 回行われ，総計 260 人の学生が参加している。本稿では，MFWI プログラムの内容を概観し，その教育効果を検証することで，7 年間の成果を総括することを目的とする。さらに，今後このプログラムが教育界に有為な人材を供給するために，何が必要なのかも検討したい。

２．MFWI プログラムの概要

(1) 武庫川女子大学アメリカ分校 MFWI

武庫川女子大学アメリカ分校，Mukogawa Fort Wright Institute (MFWI)は，1989 年にアメリカ合衆国ワシントン州スポケーン市に設立された。スポケーン市はワシントン州東端に位置し（図 1 参照），周辺部を含め人口約 20 万人を擁するその規模は，シアトルについでワシントン州で 2 番目の大きさである。武庫川女子大学がある西宮市とは姉妹都市として 48 年間交流をつづけている。MFWI キャンパスはスポケーン市北西の丘にあり， 約 356,000 ㎡の自然林を含む広い敷地を有している。キャンパスには，美しい芝生のパークエリアを中心に 19 世紀末から 20 世紀初頭に建てられた美しく重厚な赤レンガの建物が並んでおり，州及び国の歴史的風致地域として指定も受けている。キャンパス内には，学生寮，教室棟の他に，食堂，図書館，日本文化センターなどが点在し，最大 270 名の学生を収容することが可能である。

,

＊ 武庫川女子大学（Mukogawa Women's University）

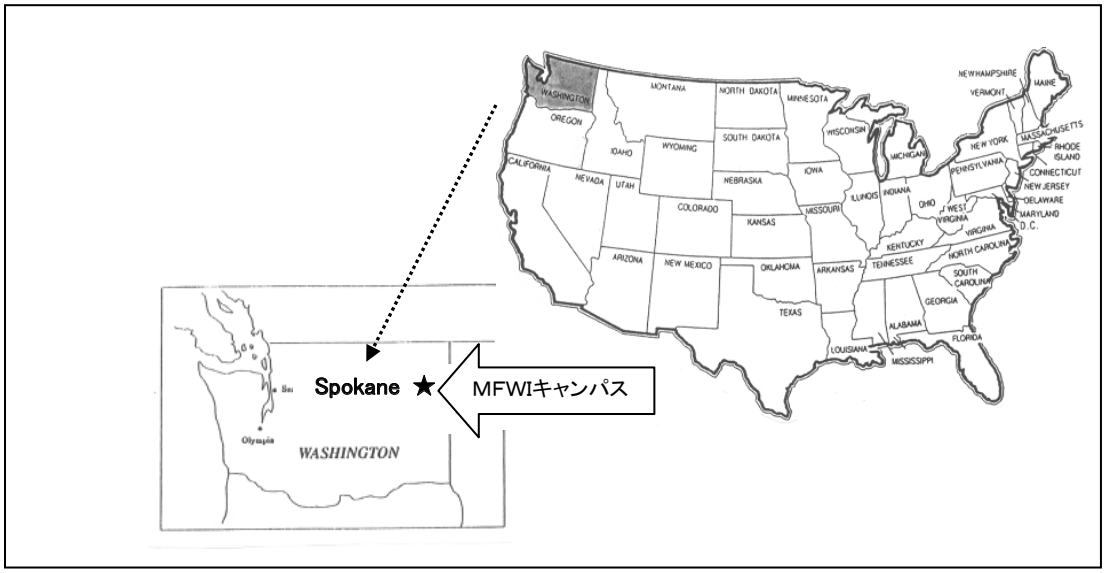

図 1　MFWI キャンパスの位置

設立当初から 2001 年度までは, 文学部英語文化学科および短期大学部英語コミュニケーション学科の学生のみが，それぞれ 3 か月半の留学を行っていたが，上述の通り，2002 年度より教育学科も MFWI プログラムを設定，さらに英語文化学科の延長プログラムも始まり，現在は 3 学科が合計 4 つのレギュラープログラムを運営している。また 8 月には，全学部学科を対象に 1 か月間の語学研修プログラムも実施している。

写真 1　MFWI のキャンパス

(2) 留学時期および参加学生

MFWI プログラムは 2 年次後期（9～12 月）に設定されており，標準的な留学期間は 109 日間である。学生募集は 1 年次の 2～3 月に行われ，希望者のみが参加する。第 1 回から第 7 回までの参加学生数は総計 260 名であり，各年度ごとの参加者数は表 1 に示されている。全学生に対して参加者が占める割合は，ほぼ 15%前後で推移していることがわかる。

表 1　年度ごとの参加学生数の推移

	年度	参加学生数	学科学生数	比率
第 1 回	2002	24	201	12%
第2回	2003	47	270	17%
第3回	2004	34	273	12%
第4回	2005	38	258	15%
第5回	2006	43	269	16%
第6回	2007	38	249	15%
第 7 回	2008	35	275	13%

(3) カリキュラムと授業

表 2 に示したように，MFWI プログラムでは全学生が 16 科目をすべて履修する。その内訳は，8 科目が教育学科開講科目，8 科目が英語文化学科開講科目である。

教育学科開講科目は，「アメリカの教育」を除いて，すべて小学校教諭や幼稚園教諭の免許取得に関する教職関連科目である。日本の教育学科本体で開講されている教職関連科目のうち，選択必修科目 1 科目以外はすべて MFWI でも開講されており，留学することで教職免許や資格を取得するのに不利にならないように配慮されている。通常，留学している期間は教職課程科目取得にとっては「空白の」期間となり，免許の取得が半年ないし 1 年間遅くなってしまうが，この MFWI プログラムでは留学先でも教職関連科目を開講し，教職への道を進みながらも海外で語学力を高め，見聞を広める機会を提供しているのである。

また，英語文化学科開講科目の一部は，教育学科の卒業単位には算入されないが，その単位は「中学校英語二種免許状」取得に用いることができる。

授業時間は日本の大学に合わせて，1 コマ 90 分で構成される。英語関係科目は，Conversation（週 4 コマ），Reading（週 3 コマ），Writing（週 2 コマ）の 3 種類に分かれており，それぞれ少人数クラス（12 名程度，事前に国内で実施する TOEIC の成績に基づいて編成）で集中的に学習する。担当者はすべてアメリカ人教員で，大学院等で ESL（English as a Second Language ; 第 2 言語としての英語教育）を専門に学んできている。授業は，個々のレベルに合わせながら，学生相互の討論や学外ゲストとの意見交換などを中心としたコミュニカティブな形態で進められる。また期限を定めて要求される課題も多く，学生は毎日宿題に追われることとなる。

表 2　MFWI プログラムにおける履修科目（2008 年度）

MFWIでの科目名	開講時数／週	本学での科目名	単位数
Conversation	4	（教育学科開講） 外国語コミュニケーションⅡ （英語文化学科開講） スピーキングⅢ リスニングⅢ	（教育） 1 （英文） 13
Reading	3	英語学入門 アメリカ文学鑑賞 イギリス文学鑑賞 英語プレゼンテーション	
Writing	2	異文化コミュニケーション ライティングⅢ	
Special Education	1	特別支援教育の研究	2
Early Childhood Education	1	乳幼児理解の研究	2
Methodology	1	教育方法の研究	2
Comprehensive Seminar	1	総合演習Ⅱ	1
Music	1	教科音楽	2
Art	1	教科図画工作演習	1
Observation		アメリカの教育	1

その他の科目のうち,「教科音楽」は，アメリカ人教員が英語による合唱指導を中心に全学生を1クラスとして行う。「教科図画工作演習」もアメリカ人教員が担当し，おおよそ20人前後のクラス規模で絵画・造形を中心に授業が進められる。「乳幼児理解の研究」および「特別支援教育の研究」もまた約20人を1クラスとして，アメリカ人教員が英語を用いて，アメリカの乳幼児教育や特別支援教育について説明する。このような専門科目を母国語以外の言語で受講することに不安を覚える学生もいるが，一つ一つの概念についてその意味を深く考えることができ，日本語を用いて学ぶよりも理解が深まることも多い。

学生が履修する16科目中,「教育方法の研究」と「総合演習Ⅱ」だけは，日本人教員が担当し，日本語で授業を行う。前者は，約40名のクラス規模で講義形式にて行われ，主に日米の教育方法を比較することで教育方法論の本質を学ぶ。また後者は，約20名のクラス規模で演習形式にて行われ，主に総合的な学習の時間における国際理解教育の実践法について考えさせる。

以上の16科目が,月曜から金曜までの5日間に1日平均3コマの割合で，時間割に組み込まれている（表3参照)。

表3　時間割表の一例

	月	火	水	木	金
1限目 8:30～10:00	Reading (E)	Writing (E)	Reading (E)	Writing (E)	総合演習Ⅱ (J)
2限目 10:15～11:45	Conversation (E)	特別支援教育の研究 (E)	Conversation (E)	Reading (E)	Conversation (E)
3限目 13:00～14:30	Conversation (E)	教育方法の研究 (J)		教科音楽 (E)	
4限目 15:30～17:00	乳幼児理解の研究 (E)	教科図画工作演習 (E)			

(E)は英語による授業，(J)は日本語による授業を表す。

写真2　授業風景(Conversation)

写真3　授業風景(Reading)

写真4　授業風景（Writing）

写真5　授業風景（Special Education）

写真6　授業風景（Early Childhood Education）

写真7　授業風景（Art）

写真8　授業風景（Music）

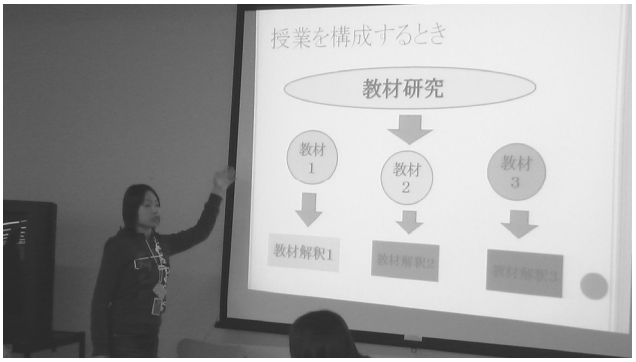

写真9　授業風景（Methodology）

(4) 課外活動

①東部旅行

MFWI プログラムでは，10 月初旬にアメリカ東部への 7 泊 8 日の研修旅行を実施している。滞在都市は，アメリカ合衆国発祥の地ボストン，文化・経済の中心地ニューヨーク，アメリカの首都であり政治の中心地であるワシントン D.C.である。表 4 に示されているように，その研修の密度は非常に高く，アメリカの歴史，文化，経済，政治を実際にその現場に立って学べる機会を提供している。同時に，研修中にはアメリカ人ガイドがすべて英語で説明をするため，学生たちはそれを聞き取った上で質問もせねばならず，英語の訓練としても機能している。また，東部旅行に出発する 2 週間前から英語の授業はすべて訪問先に関する内容となる。例えば，アメリカ独立戦争の様子を歴史上の人物のセリフを話すことで学んだり，国連，ホワイトハウスや連邦議事堂についてその基本情報を調べたり，生家を訪問する Alcott の「若草物語」を読んだり，といった活動が中心となり，授業と研修旅行が有機的に連携している。

表 4　東部旅行の行程表（2008 年度）

日	宿泊地	内容
1	ボストン	早朝：スポケーンから空路ボストンへ 翌日のプレビュー
2	ボストン	ピルグリムファーザー入植地プリマスでメイフラワーⅡ号見学 プリマスプランテーションで 17 世紀アメリカの様子を見学 L.M.オルコット生家を見学 アメリカ独立戦争の古戦場レキシントン・コンコードを見学 ソロー著『森の生活』の舞台ウォールデンポンドを見学
3	ボストン	ハーバード大学見学 ボストン市内の歴史地区を見学（ビーコンヒル，市庁舎，ボストンコモン，キングスチャーチ，墓地，クインシーマーケット，オールドノースチャーチなど）
4	ニューヨーク	バスにてニューヨークへ移動，バッテリーパークから自由の女神へ。 グラウンドゼロ見学 ウォール街見学
5	ニューヨーク	国連本部見学 エンパイヤステートビル見学 マンハッタン5番街にて自由行動 ブロードウェーミュージカル（「ライオンキング」）見学
6	ワシントン D.C.	ダコタハウス，セントラルパーク見学 列車（アムトラック）にてワシントン D.C.へ移動
7	ワシントン D.C.	アーリントン国立戦没者墓地見学 硫黄島メモリアル，F.ルーズベルトメモリアル，朝鮮戦争メモリアル，ベトナム戦争メモリアル見学 ジョージタウンにて昼食 リンカーンメモリアル，キング牧師演説メモリアル見学 連邦議事堂，ホワイトハウス見学、ジェファーソンメモリアル見学
8	MFWI	大使館通り見学 スミソニアン博物館群見学 空路スポケーンに帰着

写真 10　東部旅行（ボストン）

写真 11　東部旅行（ニューヨーク，国連）

写真 12　東部旅行（ワシントン DC）

写真 13　東部旅行（ワシントン DC）

②ホームステイ

11 月初旬に 2 人一組でアメリカ人家庭に 2 泊 3 日滞在する。ホストファミリーはすべて無償で引き受けてくださっているボランティア家庭で，学生たちは，アメリカ人の日常の家庭生活（家族のあり方，生活様式，職業観，教育観，宗教観など）を体験し，なおかつ普通の人々が話す日常会話に触れることができる。加えて，自己紹介から家族の紹介，日本文化・社会の紹介などみずから英語で発信する必要にも迫られ，それまであまり深く考えてこなかった，あるいは知ろうとしなかった自分に気づくことができ，それがまたプログラムでの学びの動機づけとなる。なお，ホームステイ後は，週末などにホストファミリーから招待があれば何度でも訪問することが可能で，特にサンクスギビングデイには留学生全員が再び招かれ，伝統的な夕食や習慣を経験することができる。

写真 14　ホームステイの様子1

写真 15　ホームステイの様子2

③観察実習

「アメリカの教育」は，MFWI プログラム参加者のみが履修できる科目で，10 月下旬に行われる現地の小学校・幼稚園での観察実習（MFWI 科目名「Observation」）に対応している。学生は月曜から金曜まで 5 日間，9 時から 15 時まで学校・園に滞在する。原則的には 1 クラスに 1 人が割り当てられ，担任教諭や児童たちとの密なコミュニケーションを通じて，アメリカの教育の実際を学ぶことができる。教授法や学級経営に関するレポートは「教育方法の研究」と連動しており，クラスでの日本文化紹介の実践としては「総合演習Ⅱ」における国際理解教育と連動した学びができるように配慮されている。

写真 16　観察実習（授業を観察している様子）

写真 17　観察実習（日本を紹介する活動）

(5) 学生生活

学生は，留学期間中，キャンパス内の寮で生活する。1 棟の寮では約 10 名の学生が起居を共にしている。寮にはレジデント・アシスタント（RA）と呼ばれる女子大学生が住んでおり，寮からそれぞれの大学へ通っている。夕方からは学生と生活や食事を共にしながら，留学生活に関する相談に乗ったり，必要な援助をしたり，週末にはグループ行事を企画したりする。また，RA は毎週月曜から木曜日の夕食後に「チュートリアル」を実施している。「チュートリアル」とは，ゲームや映画など様々な活動を通して英語の発音練習をしたり，アメリカ文化や習慣を学ぶ時間であり，教師からではなく同年代の友人から学ぶことで知識の幅を広げ，動機づけも高くなる。

その他，レジデント・アドバイザーと呼ばれるバイリンガルの日本人職員が生活上の悩み，学習上の疑問，その他どのような心配ごとにも親身に相談，指導に当たっており，外国生活の不安を和らげている。必要に応じて，キャンパス内の保健センターに常駐するアメリカ人看護師が医療的な対応を、日本人カウンセラーが心理的対応を行う。また，医師の診察を受けたい場合，症状に応じてキャンパス外の病院で診察・治療を受けることができる。食生活は，基本的に食堂で 3 食を提供しており，栄養バランスを考えた食事が用意されている。

写真 18　食堂での食事風景

写真 19　RA によるチュートリアル

(6) 地域コミュニティとの交流

学習，共同生活と並んで MFWI プログラムの意義といえるものが，地域コミュニティとの交流である。通常の授業でも，キャンパス内の教室内で完結するのではなく，可能な限り学外の人々との会話や討論ができるように配慮されている。表 5 には，2008 年度に実施された様々なキャンパス外活動が要約されている。ホームステイはもちろん，教会や美術館，レストランなど地元コミュニティとの交流を促進しているが，特に数多く訪問している

のが，各種教育機関である。幼稚園，小学校，中学校，高校，大学はもちろん，特別支援学校，ギフテッド（英才教育）クラス，書店，教材店など，ありとあらゆる場所を訪問しては，日本との相違点を考察したり，教育について議論したりしている。後述するように，2006 年度からは，西宮市とスポケーン市に 11 組存在する小学校同士の姉妹校の交流をお手伝いするプロジェクトも始まっており、大きな成果をあげている。

表 5　MFWI プログラム中のキャンパス外活動

Destination	Class
1.　Spokane tour	Conversation
2.　Bookstores and restaurant	Conversation
3.　SFCC Preschool (Reading books for children)	Reading
4.　Elementary School (pen pal activity)	Writing
5.　Chase Middle school	Conversation
6.　Lewis & Clark High school	Conversation
7.　University (GU, EWU, WU)	Conversation
8.　Museum of Arts and Culture	Reading
9.　Teaching supplies store	Conversation
10.　Teacher's house	Conversation
11.　Ridgeview Elementary School 1	Sister-school
12.　Ridgeview Elementary School 2	Sister-school
13.　Finch Elementary School	Sister-school
14.　Sheridan Elementary School	Sister-school
15.　Libby Center Tessera program for gifted children	Methodology
16.　Whitworth University International Education Week	Methodology
17.　Guild Neuromuscular Center	Special Education
18.　North Wall School	Early Childhood Education

また，キャンパス内には「日本文化センター（The Japanese Cultural Center ; JCC）」が併設されており，日本語教育を行うほか，日本文化に関する図書室，日本伝統文化・工芸品の展示室を設け，多くのスポケーン市民との接点となっている。また、現地の子どもを対象とした、週末などに開かれる紙芝居や絵本の読み聞かせイベントには数多くの学生が参加し，コミュニティの人々と交流している。

３．MFWI プログラムの効果の検証

(1) 英語力は向上したか

週 15 コマ中に英語関連科目が 9 コマを占める MFWI プログラムの効果として，英語力の向上を検証することは避けて通れない。MFWI プログラムでは英語力の向上を検証するために，留学前（6 月）と留学終盤（12 月）の計 2 回，TOEIC（IP）テストを受けさせている。TOEIC とは，Test of English for International Communication の略称で，英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価するために，日本では企業や学校などで広く用いられているテストである。得点は 10 点から 990 点の範囲に分布する。図 2 に，過去 7 年間にわたる参加者の平均 TOEIC スコアの推移を留学前（PRE）と留学終盤（POST）それぞれについて示した。残念ながら，初年度であった 2002 年に関しては PRE のデータがない。

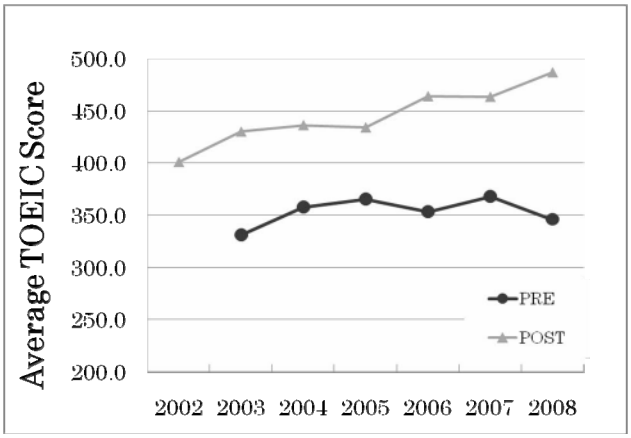

図 2　MFWI プログラム参加者の平均 TOEIC スコアの推移

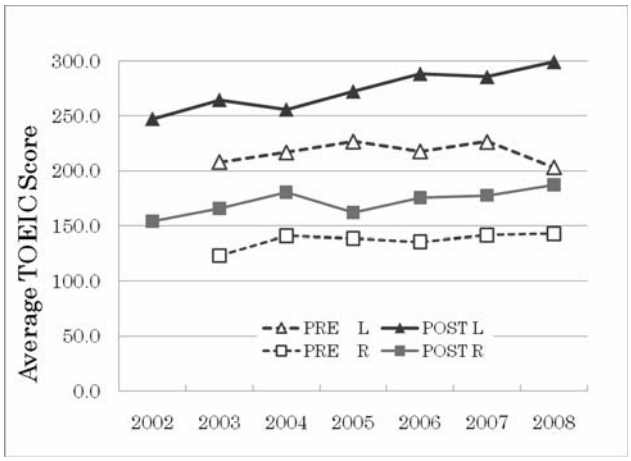

図 3　MFWI プログラム参加者の平均 TOEIC スコアの推移
（Listening と Reading を別に表した）

まず留学前のスコアは 6 年間一貫して変化しておらず，約 350 点程度を示している。このスコアが武庫川女子大学文学部教育学科の学生の平均的な実力といえる。一方，留学終盤に測定したスコアは，どの年度においても留学前と比べて 100 点前後の上昇を示しており，平均点は約 450 点程度となっている。また，初年度に約 400 点であった POST スコアは，年々上昇し，2008 年度には 490 点にまでなった。すなわち，MFWI プログラムの英語集中訓練は，参加者の英語力を向上させるある程度の効果を持っており，プログラムを洗練させることにより，その効果は年々大きくなっているといえる。

では，この平均スコアに表れた英語力は全体でどの程度に位置するものなのであろうか。TOEIC 協会が公開しているデータによれば，大学 2 年生の全国平均値は 428 点である。つまり，参加学生の平均値は留学前には全国平均に比べて大きく下回っていたのが，留学終盤には追いつき，さらには上回りつつあるといってもよいだろう。また，TOEIC 協会が一般企業に対して行った調査では，企業が新入社員に期待するスコアは約 450～550 点である。このスコアとの比較によっても，MFWI プログラムが参加者の英語力を社会に認められる程度に向上させていることがわかる。しかし，2011 年度から小学校に導入される外国語活動に十分対応できるだけの英語力なのかどうかはまだ未知数である。文部科学省は，「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」（文部科学省, 2002）の中で，英語教員が備えておくべき英語力の目標値を 730 点程度としているが，これは中学・高校に関しての要求水準であり，小学校教諭に関しては具体的な数値をあげていない。授業補助を担う ALT とのコミュニケーションを考えれば，おそらく 500～600 点程度は必要とされるのではないだろうか。今後も，英語関連科目をさらに洗練させて，参加学生の英語力を向上させる必要がある。

図 3 は，MFWI 参加者の TOEIC スコアの推移を，Listening と Reading それぞれの平均値として示したものである（それぞれ満点は 495 点）。この結果からわかるのは，MFWI プログラム参加者は，留学の前後にかかわらず英語の聞き取りより読解の方が苦手であること（一般的に言われる日本人英語の特徴とは逆であるところが興味深い），留学によって両方とも向上するが，向上の程度が大きいのは聞き取りの方であることなどである。したがって，今後の MFWI プログラムで英語力のさらなる向上を目指す場合，英文読解すなわち単語力や文法理解を伸ばす必要があることが示唆される。

(2) 教育に関する理解は深まったか

TOEIC スコアという明確な測度がある英語力とは異なり，MFWI プログラムのもう一つの目的である「日米の教育を両方見ることで教育への理解を深める」という目的の達成度を検証することは簡単ではない。一つの測度として，プログラム終了後に行っている事後評価の結果をあげたい。表 6 に示されているのは，2007 年度の結果である。プログラムに対する満足度はおおむね高く，教育に対する理解，異文化に対する理解も進んだと自己評価していることがわかる。

また，2009 年度教員採用試験（2006 年度に MFWI プログラムに参加した学生が現役で受験した）における採用内定者は 43 名中 23 名を数え，学科内の採用内定者の中でも大きな割合を占める。彼らの合格が MFWI プログラムの効果かどうかは一概には言えないが，教育に対する洞察力が鍛えられた可能性はあるのではないだろうか。

表 6　事後評価の結果（2007 年度）

設問	平均値
全体を通して良かったか	4.96
英語力はついたと思うか	3.86
アメリカの教育について理解できたか	4.18
日本の教育について再認識できたか	4.21
アメリカ文化について十分知ることができたか	4.32
日本文化について再認識できたか	4.11
この留学によって国際感覚が養われたと思うか	4.54
この留学によって人間的に成長したと思うか	4.61

(3) 地域コミュニティへの貢献はできているか

MFWI プログラムの大きな目的が，学生に対する教育にあることは言うまでもないが，本学がある西宮市の人々，そしてMFWIキャンパスがあるスポケーン市の人々に対する貢献もこのプログラムの大きな柱の一つである。従来もJCC を通じた活動などで地元コミュニティへの貢献を意識はされていたが，2006 年度から始まった「西宮－スポケーン姉妹校関係活性化プロジェクト」では，両市の児童たちと直接触れ合って交流を支援することができている。西宮市とスポケーン市が姉妹都市提携を結んでいることから，両市の公立小学校 11 組が姉妹校関係を結んでいるが，提携後数年がたつと担当者も異動し，ほとんどの交流が事実上絶えてしまっているような状態であった。そこで，毎年留学プログラムで両市の間を往復する武庫川女子大学生，とりわけ将来教職を志す学生が，二校の間で手紙やビデオレター，プレゼントを運び，互いの姉妹校を紹介するイベントを開催するプロジェクトが立ち上げられた。2006 年度は西宮市立上ヶ原小学校とスポケーン市立フィンチ（Finch）小学校との交流支援をスタートさせ，2007 年度は高木小学校とシェリダン（Sheridan）小学校，2008 年度は苦楽園小学校とリッジビュー（Ridgeview）小学校との交流を支援してきた。2009 年度からは西宮浜小学校とハンブレン（Humbren）小学校の交流も支援する予定である。

すでに 3 年目になった上ヶ原－フィンチの交流の年間プログラムを表 7 に示した。毎年，同じ時期に定期的に活動することで，児童のみならず保護者の方々にも認知されつつある。この活動により，両校の児童は外国に姉妹校があることを意識し，外国語教育や国際理解教育を促進することができる。一方，教師を目指す本学学生にとっても，現場で子どもたちと触れ合いながら国際理解教育を学ぶまたとない機会となっている。

表 7　上ヶ原小学校とフィンチ小学校の姉妹校交流支援の年間計画

5 月 ～6 月	上ヶ原小学校において6年生の英語活動に参加 6年生がフィンチ小学校へのビデオレターを撮影
7 月	「上ヶ原盆踊り」に参加，ビデオ撮影
9 月	MFWI プログラム開始
10 月	フィンチ小学校での１週間の観察実習
11 月	フィンチ小学校体育館にて，上ヶ原紹介イベントを開催。 その後，10 クラスで手紙や作品，ビデオレターなどを制作
12 月	MFWI プログラム終了・帰国
2月	上ヶ原小学校において「上ヶ原まつり」に参加。 フィンチ小学校およびアメリカを紹介するブースを設置
3月	上ヶ原小学校体育館にて，フィンチ小学校紹介イベントを開催

写真 20　姉妹校交流支援活動（西宮）

写真 24　姉妹校交流支援活動（西宮）

写真 21　姉妹校交流支援活動（スポケーン）

写真 25　姉妹校交流支援活動（西宮）

写真 22　姉妹校交流支援活動（スポケーン）

写真 26　姉妹校交流支援活動（西宮）

写真 23　姉妹校交流支援活動（スポケーン）

(4) 卒業後の生活に生かされているか

前々節でも述べたが，教育の効果を可視化することには常に困難がつきまとう。MFWI プログラムの効果を検証する一つの試みとして，卒業生へのフォローアップ調査を行った。調査は 2007 年 10 月に行われ，その時点で既に卒業していた MFWI 参加者（2002 年度～2004 年度）105 名に調査用紙を郵送した。そのうち返送され，データに不備のなかったものは 20 名であった。回収率は低いものの，卒業後の仕事や生活に対して MFWI プログラムがどのような影響を及ぼしたのかを知ることのできる資料ではある。事実，海外留学の経験を活かして，インターナショナルスクールで保育

士として働いたり，アメリカの大学院に進学した学生も存在している（表 8 参照）。

表 8 卒業後の進路

就職先	人数
小学校	6
一般企業	4
幼稚園	3
インターナショナルスクール	2
大学院	2
保育所（園）	1
公務員	1
養護施設	1

また，この 20 名のうち，教職または保育職に就いている 12 名に「MFWI での経験は現在の仕事に役立っているか」と聞いたところ，10 名が「役立っている」と答えた。さらに「現在，国際理解教育にかかわっているか」という問いには，半数の 6 名が「かかわっている」と答えた。先述したように，回収率が低く，信頼性の高いデータとはいえないが，MFWI プログラムによって仕事や人生が変わった学生も確かに存在するのである。

４．今後の展望

通信・移動手段の発達により，「国際化」はどの国においても必然の流れである。国の教育政策としてもその方向へ向かっているこの時代において，「海外留学経験のある教員・保育士養成」の重要性はますます高まっている。国際理解にとどまらず，国際化の教育を進めていける指導者の養成を積極的に実施することは，他大学との差別化をもたらし，学科の大きな特徴の一つとして社会にアピールすることができる。このような目的を実効性あるものにするため，以下の 3 点において，MFWI プログラムを改善することができると考える。

(1) 英語力のさらなる向上

2011 年度から小学校外国語活動が本格実施される。その原案によれば，小学校外国語活動のほとんどが外国人 ALT とのティーム・ティーチングであることから，英語によるコミュニケーション能力が，今後の小学校教員に必須の能力となることが予想される。その能力向上の指標として，TOEIC スコアにおける具体的目標値を，参加者平均 600 点（範囲 470 点～730 点）を目指す。

しかしながら，TOEIC スコアにおいて平均 140 点上昇しているという現状からさらなる向上は，3 カ月半の留学期間や日本人だけの寮生活という点から，やや難しいといわざるを得ない。やはり，PRE の値（留学前のスコア）を高めておくことが，留学後のスコアを目標値に近づけるために必要であろう。さらに図 3 からも示唆されるように Reading にかかわる能力（単語力や文法力）を，日本にいる間，すなわち 1 年次に高めておくことが重要となるだろう。

(2) 英語教育実践能力の伸長

英語に初めて触れる幼児・児童への英語教育実践能力を伸長させる必要がある。広く世界で行われている ESL（English as a Second Language）教育の技法を，その本場であるアメリカで学ぶのである。

具体的な方策として，「外国語活動の指導」（仮称，2 年次後期，2 単位）を新設する。担当者として，MFWI では現地外国人教員，本学では MFWI から派遣されている学科嘱託教員および非常勤教員を充てる。いわゆるクラスルームイングリッシュの習得から，指導案の作成，教材の選定，教授技術，評価のあり方など，将来の英語活動展開に役立つ内容を学ぶのである。小学校英語必修化という文脈の中で社会から要請される能力を伸長させることになるだろう。

(3) 国際理解教育を実践する能力を養成

国際社会で「生きる力」を育むために，異文化理解，自国文化発信などを含む国際理解教育を実践する具体的な能力を養成する必要がある。

具体的には「国際化と教育」（2 年次後期，2 単位，小幼免では「教科又は教職に関する科目」，保育士資格では選択必修）を新設する。担当者として，MFWI では学科引率教員，本学では学科専任教員を充てる。英語活動にとどまらず，国際化が進む世界の現状，異文化理解，自国文化の紹介，国際社会で活躍できる人材の育成などについて総合的に学ぶことを目指す。

(4) その他

現在「アメリカの教育」（2 年次後期，1 単位）　という科目名で行われている現地校での観察実習を発展・拡充する可能性も考えられる。現状 1 週間のところを 2 週間に延長し，現地教育委員会（Spokane School District）などでの研修を加えたい。その際に何らかの単位（credit）の取得ができる可能性も探りたい。

また，現地大学（EWU，Gonzaga，Whitworth など）と提携した実習プログラムを考案し，実行する。具体的には各大学の教育学部（学科）の教員による授業またはスーパービジョンを受けられるようにする。将来的にはいわゆる「デュアルディグリー」を取得できるようにしたい。

上記の諸改革を実現するため，国際理解教育または児童英語教育を専門とする専任教員を採用することが必要である。学生への教育のみならず，研究者とし

て学会活動などにおけるアピールにもなる。また，将来将来的展望として，MFWI 留学を含めた「外国語活動強化コース」というようなものを設置し，1 年時から特別に英語や国際理解教育などを強化する可能性も考えられる。このコースは，附属高校の SEH（文部科学省指定 Super English High school）コースの受け皿としても機能すると考えられる。

５．終わりに

本稿で論じてきた武庫川女子大学文学部教育学科における MFWI プログラムは，国際的な視野を持った教員を養成するプログラムとして，国内では他に例を見ない画期的なものである。このプログラムの真価は，卒業生たちがそれぞれ第一線で活躍し，各々の職場で指導的な役割を果たすようになった時に，ようやくわかるものかもしれない。それまでは，プログラム自体を改善し続ける不断の努力が必要となるであろう。今後の展開に期待したい。

－参考文献－

(1) 東野裕子・高島英幸　『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』　高陵社書店, 2007

(2) TOEIC 運営委員会　『TOEIC テスト 新公式問題集 Vol. 3』　TOEIC 運営委員会, 2008